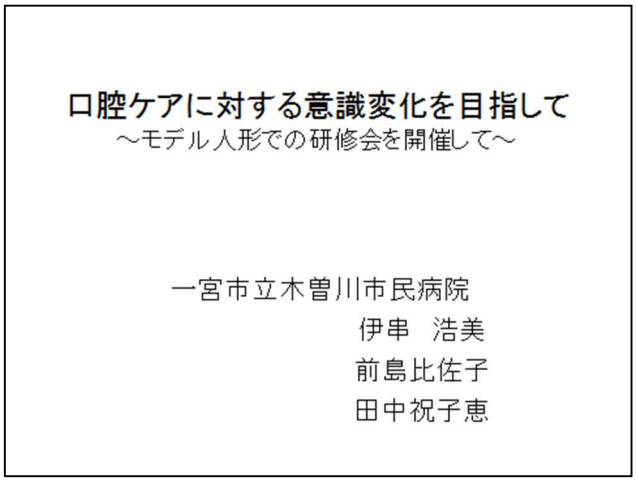
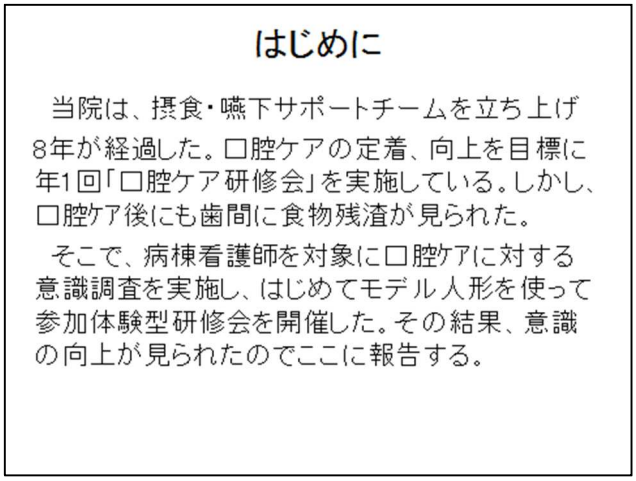
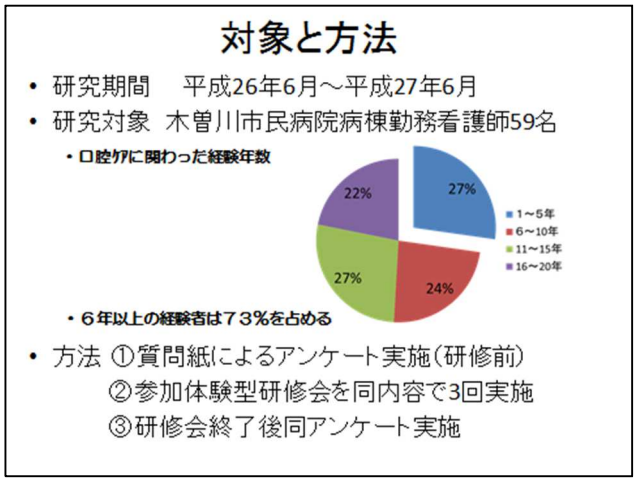
演題 261	口腔ケアに対する意識変化を目指して ～モデル人形での研修会を開催して～
	発　表　者　伊串 浩美（愛知県　一宮市立木曽川市民病院） 共同研究者　前島 比佐子、田中 祝子恵





当院では、摂食・嚥下サポートチームを立ち上げ 8 年が経過し、年 1 回「口腔ケア研修会」を実施している。しかし、臨床患者の口腔内汚染が改善しないケースがあり、口腔ケアの定着、向上がみられないことに疑問を感じ、看護師の意識調査を実施した。その結果、「口腔ケアに対する関心が薄い」ことが明らかになった。

そこで「意識変化」を目的とし、モデル人形を使用した「参加体験型研修会」を開催した。前後のアンケート結果で、口腔ケアに対する意識変化が見られたのでここに報告する。



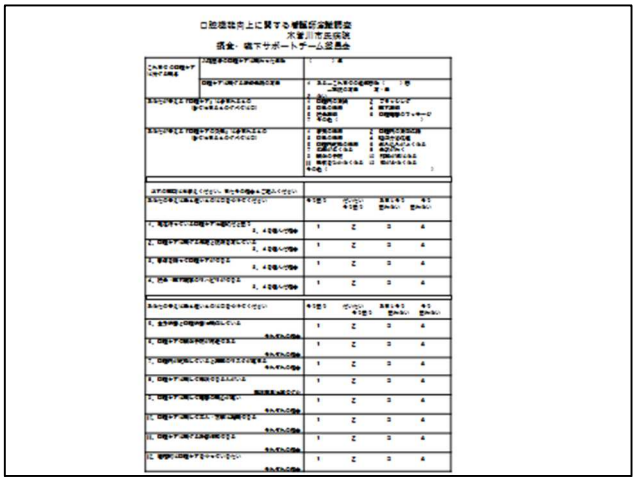
方法：参加型体験研修会を同内容で 3 回実施し、前後でアンケート実施

こちらが、認定看護師と言語聴覚士が中心となり、モデル人形を囲んで、口腔ケア及び摂食嚥下リハビリについての方法を指導した風景です。

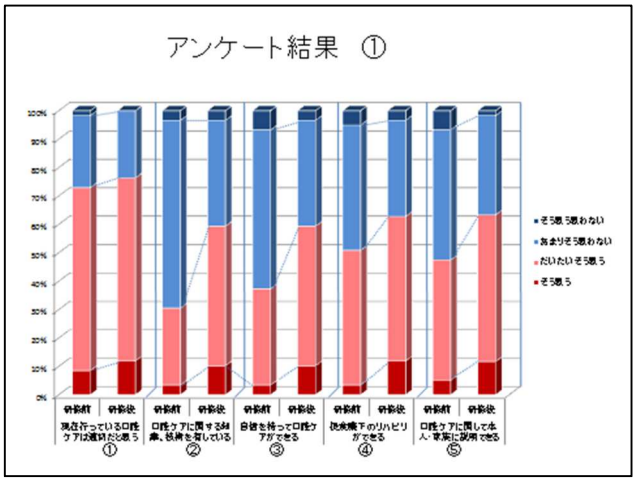
みんなが参加しやすく、その場で質問できる環境作りをした結果、研修中も積極的な質問や、活発な意見もあり、研修後のアンケートから、「質問し易かった」「人形を使ったことで、分かりやすく興味が持てた。」という声が聞かれた。

倫理的配慮

本研究の目的と内容については紙面で説明して同意を得る。収集したデータは研究者のみが扱い、対象者の不利益が生じることなく、アンケート結果から個人の特定ができないように配慮する。



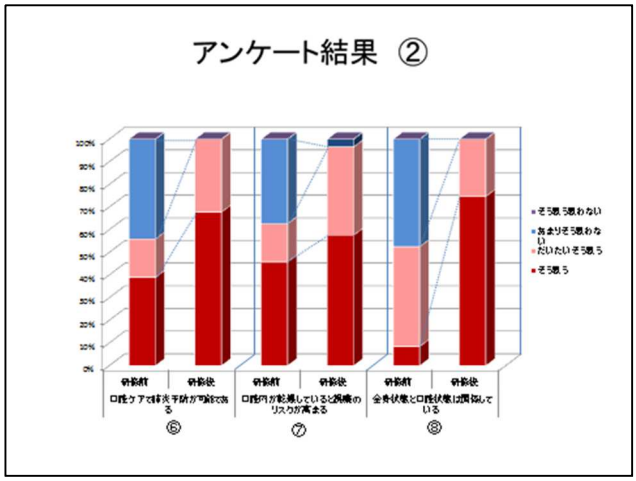
アンケート結果 ①



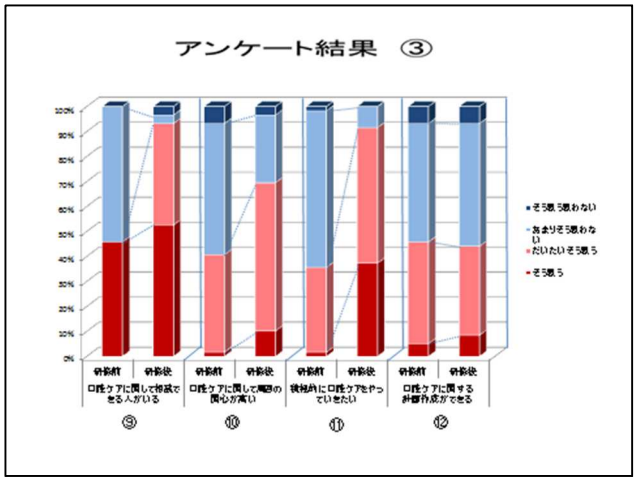
アンケート結果①

研修前のアンケートでは、現在行っている口腔ケアは、「適切だと思う」が 73%あるのに対し、「自信を持って口腔ケアができる」が 37%と低値を示しており、適切だと思いながらも自信を持って口腔ケアを実践しているスタッフが少ないという結果でした。

アンケート結果 ②



アンケート結果 ③



考 察

・口腔ケアに関する知識・技術を有していなかったことや、自信を持って口腔ケアができていなかったことが考えられる。

・これまでの口腔ケアに対する意識は、知識や技術によるものではなく、エビデンスに基づいた実践が出来ていなかったことが考えられる。

・モデル人形を使い参加体験型研修会を開催したことで、分からないけどできるといった口腔ケアに対する意識を変えることが出来たと思われる。

「現在行っている口腔ケアは適切だ」と思っていながらも、「自信をもって口腔ケアができる」という回答が低い理由として考えられるのは、方法も目的も理解しているが、優先順位が低いため、十分な時間を掛けられない事が考えられます。また困難ケースとして、出血傾向や噛み締めなどによる強い抵抗のある患者に対する適切な方法が分からないといった理由が考えられます。

おわりに

参加体験型研修会を行ったことで、看護師の口腔ケアに対する意識が向上できた。
今後は、この結果を維持、向上するために実践できているか、客観的に評価する基準を作る必要があり、更なる向上を目指します。

研修後のアンケートから「口腔ケアに関して相談できる人がいる」「口腔ケアに関して周囲の関心が高い」「積極的に口腔ケアをやっていきたい」という項目が明らかに上昇したのは、研修により知識が深まり、口腔ケアに対する姿勢に変化がみられた結果であると考えられます。

研修後、臨床では口腔内の乾燥や汚染のある症例に関心を持ち、チームメンバーに相談する件数が増えた。

引用・参考文献

1)ヴァージニア・ヘンダーソン:看護の基本となるもの,第7版,日本看護協会出版会,2002.
2)杉山理恵・柿沼香里:看護技術摂食・嚥下障害看護　口から支えるケア, メヂカルフレンド社. Vol57, NO9, 2011.
3)西川利恵:看護技術口腔ケア「口から食べる」を支えるアプローチ, メヂカルフレンド社. Vol60, NO10, 2014.
4) 田久浩志: 私だってできる看護研究, 医学書院, 2015